

【 復活のトロパリ 第7調 】

ハリスト オス か み よ 、 なんぢは じゅうじ か に て し を  
神 爾 十 字 架 死  
 ほ ろ ぼ し 、 と う ぞ く の た め に ら く え ん を ひ  
滅 盗 賊 爲 樂 園 開  
 ら き 、 け い こ う ぢ ょ の か な し み を な ぐ さ  
携 香 女 悲 慰  
 め 、 し と に なんぢが ふ く か つ して 、 せ か 界  
使 徒 爾 復 活 世 界  
 い に お お い な る あ わ れ み を た ま い し を つ た え  
大 憐 賜 傳  
 さ せ た ま え り 。  
給

【 主の割礼祭のトロパリ 第1調 】

か が や け る ほ う ざ に 、 い と た か き に 、  
輝 寶 座 至 高  
 む げ ん の ち ち と し ん せ い な る なんぢ の し ん と と も に ざ  
無 限 父 神 聖 爾 神 共 坐  
 す る イ イ ス ス よ 、 なんぢは あ ま ん じ て 、 お つ  
爾 甘 夫  
 と を し ら ぎ る ど う て い ぢ ょ なんぢ の は は よ り  
識 童 貞 女 爾 母  
 ち に う ま れ た り 。 ゆ え に よ う か め  
地 生 故 八 日 目

のひととして かつれいをうけたまえ  
 人 割 禮 受 給  
 り。ゆい いちひとをあいするしゅよ  
 惟 一 人 愛 主  
 こうえいはなんぢのじんじなるおもんばかりにき  
 光 榮 爾 仁 慈 慮 歸  
 し、こおえいはなんぢのめぐみにきし、  
 光 榮 爾 恵 歸  
 こうえいはなんぢのかんようにつきす。  
 光 榮 爾 寛 容 歸

【 聖大ヴァシリイ祭のトロパリ 第1調 】

なんぢのこえはぜんちにつたわり、ぜんち  
 爾 聲 全 地 傳 全 地  
 はなんぢのこことばをうけたり、なんぢはこれ  
 爾 言 承 爾 此  
 をもってかみにかなうおしえをしき、  
 以 神 適 教 布  
 ばんぶつのせいをあきらかにし、ひとのふうぎ  
 萬 物 性 闡 人 風 儀  
 をおさめたり。おうたるしさいはん、  
 修 王 司 祭 班  
 こくしょうなるしいんぷよ、ハリストスかみに  
 克 肖 神 父 神

われらのたましいのすくわれんことをいのりた給  
我等 靈 救 祈 給

まえ。

【 聖大ヴァシリイ祭のコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこ おとせいしんにき  
光 榮 父 子 お と 聖 神 歸

す、

かみのしあいなるこくしょうしゃヴァシリイよ、  
神 至 愛 克 肖 者

なんちはきょうかいのうごかざるもといとあら  
爾 教 會 動 基 顯

われて、しゅうじんにうばわれざるしさんをわ  
衆 人 奪 賞 産 頒

かあち、なんちののりをもってこれをいん  
爾 則 以 之 印

せり。

【 主の割礼祭のコンダク 第3調 】

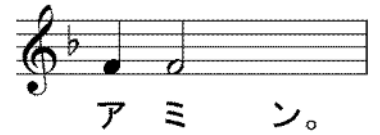
いまもいつもよよにい、アミン。  
今 何 時 世 世 に い 、 ア ミ ン 。

ばんゆうのしゅはかつれいをしのび、じんじな  
萬 有 主 割 禮 忍 仁 慈

るものとしてじんるいのざいかをたちて、こん  
 者 人類 罪過 断 今  
 にちすくいをせかいにたもおう。いとたか  
 日 救 世界 賜 至 高  
 きにはぞうぶつしゅのしさいしゅ、ハリストスの  
 造 物 主 司 祭 首  
 おうぎにたつするもの、こうめいにして  
 奥 義 達 者 お の 光 明  
 しんせいなるヴァシリイもよろこおおぶ。  
 神 聖 喜

司祭) ( 黙誦：<sup>せい かみ せいじゃ うち いこ</sup>聖なる神、<sup>せいさん こえ もつ かしょう</sup>聖者の中に息い、<sup>さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう</sup>セラフィムより讃榮せられ、<sup>ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ</sup>ヘルヴィムより讃榮せられ、<sup>ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい</sup>悉くの天軍より伏拝せられ、<sup>た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい</sup>萬物を無より有となし、<sup>さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの</sup>人を爾の像と肖とに依りて造り、<sup>しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ</sup>爾が諸の賜を以て之を飾り、<sup>もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ</sup>願う者に智慧と明悟とを與え、<sup>せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい</sup>罪を行う者を棄てずして、<sup>しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しよせいじん きとう よ</sup>其救の爲に痛悔を立て、<sup>けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ</sup>我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、<sup>に、</sup>此の時に於ても、<sup>に、</sup>爾が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、<sup>に、</sup>爾に當然の伏拝讃榮を奉るに堪うる者となし、<sup>に、</sup>爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、<sup>に、</sup>爾の仁慈を以て我等に臨み、<sup>に、</sup>我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、<sup>に、</sup>我が靈と體とを聖にし、<sup>に、</sup>我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、<sup>に、</sup>聖なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る  
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め  
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い  
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ  
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、  
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん  
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。  
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う  
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われらを  
 殺 聖 常 生 者 我 等 を  
 あわれめよ。  
 憐

司祭) ( 黙誦：<sup>しゅ な よ き もの あが ほ</sup>主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、<sup>ぎ もの なんぢ そのくに</sup>ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
<sup>こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ</sup>の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 )

【 プロキメン 提綱 洗礼祭前の主日 第6調 及び 成聖者の 第1調 】

司祭) <sup>つつし き しゅうじん へいあん</sup>慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup>爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) プロキメン、<sup>しゅ なんぢ たみ すく なんぢ ぎょう ふく くだ たま</sup>主よ、爾の民を救い、爾の業に福を降し給え、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに  
 主 爾 民 救 爾 業  
 ふくをくだしたまえ。  
 福 降 給 え

誦經) <sup>しゅ われなんぢ よ われ かため わ ため もだ なか</sup>主よ、我爾に呼ぶ、我の防固よ、我が爲に黙す母れ、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに  
 主 爾 民 救 爾 業  
 ふくをくだしたまえ。  
 福 降 給 え

誦經) <sup>わ くち えいち いだ わ こころ おもい ちしき いだ</sup>我が口は睿智を出し、我が心の思は智識を出さん、

わがくちはえいちをいだし、わがここ  
 我 口 睿 智 出 我 心



【 アポστόロス 使徒經 298 端 ティモフェイ後書 4 章 5～8 節

254 端 コロサイ書 2 章 8～12 節

318 端 エウレイ書 7 章 26～8 章 2 節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと</sup> 聖使徒パヴエルが<sup>たつ</sup> ティモフェイに<sup>こうしょ</sup> 達する<sup>よみ</sup> 後書の讀、

司祭) <sup>つつし</sup> 謹みて<sup>き</sup> 聽くべし、

誦經) <sup>こ</sup> 子ティモフェイよ、<sup>なんぢ</sup> 爾は<sup>いつさい</sup> 一切の<sup>こと</sup> 事に<sup>けいせい</sup> 徹醒し、<sup>くるしみ</sup> 苦を<sup>しの</sup> 忍び、<sup>ふくいんしゃ</sup> 福音者の<sup>わざ</sup> 工を<sup>おこな</sup> 行い、

<sup>なんぢ</sup> 爾の<sup>しょく</sup> 職を<sup>つく</sup> 盡せ。<sup>けだしわれす</sup> 蓋我<sup>まつり</sup> 已に<sup>けん</sup> 祭として<sup>わ</sup> 獻ぜらる、<sup>ゆ</sup> 我が<sup>ときいた</sup> 逝く<sup>われよ</sup> 時<sup>たたかい</sup> 至れり。我<sup>たか</sup> 善き<sup>は</sup> 戦を

<sup>たか</sup> 戦い、<sup>は</sup> 馳すべき<sup>みち</sup> 程を<sup>つく</sup> 盡し、<sup>しん</sup> 信を<sup>まも</sup> 守れり。<sup>いま</sup> 今より<sup>のち</sup> 後、<sup>ぎ</sup> 義の<sup>かんむり</sup> 冕は<sup>われ</sup> 我の<sup>ため</sup> 爲に<sup>そな</sup> 備えらる、<sup>しゅ</sup> 主、

<sup>ぎ</sup> 義なる<sup>しんぱんしゃ</sup> 審判者は、<sup>か</sup> 彼の<sup>おい</sup> 日に<sup>これ</sup> 於て、<sup>われ</sup> 之を<sup>たま</sup> 我に<sup>ただわれ</sup> 賜わん、<sup>すなわち</sup> 第我のみならず、<sup>かれ</sup> 乃凡<sup>あらわれ</sup> そ彼の<sup>あらわれ</sup> 顯現

<sup>した</sup> を<sup>もの</sup> 慕う<sup>たま</sup> 者にも<sup>たま</sup> 賜わん。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) ティモフェイよ、あなたは、何事にも慎み、苦難を忍び、伝道者のわざをなし、自分の務を全うしなさい。わたしは、すでに自身を犠牲としてささげている。わたしが世を去るべき時はきた。わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう。

\*\*\*\*\*

誦經) <sup>けいてい</sup> 兄弟よ、<sup>つつし</sup> 慎め、<sup>ひと</sup> 人が、<sup>したが</sup> ハリストスに<sup>ひと</sup> 循わずして、<sup>いでん</sup> 人の<sup>したが</sup> 遺傳に<sup>よ</sup> 循い、<sup>げんこう</sup> 世の<sup>したが</sup> 元行に<sup>したが</sup> 循

<sup>りがく</sup> う<sup>くうじゅつ</sup> 理學と<sup>もつ</sup> 空術とを<sup>なんぢら</sup> 以て、<sup>まだ</sup> 爾等を<sup>ため</sup> 惑わさざらん<sup>けだしんせい</sup> 爲なり。蓋<sup>じゅうまん</sup> 神性の<sup>ことごと</sup> 充満は<sup>じつ</sup> 悉く<sup>じつ</sup> 實

<sup>たい</sup> 體を<sup>もつ</sup> 以て<sup>お</sup> ハリストスに<sup>なんぢら</sup> 居るなり。爾<sup>かれ</sup> 等も<sup>すなわち</sup> 彼、<sup>しゅりょうけんべい</sup> 即凡の<sup>かしら</sup> 首領<sup>もの</sup> 權柄の<sup>あ</sup> 首たる<sup>あ</sup> 者に<sup>あ</sup> 在

<sup>じゅうまん</sup> りて、<sup>かれ</sup> 充満<sup>なんぢら</sup> せられたり。彼<sup>また</sup> に<sup>もつ</sup> 在りて、<sup>かつれい</sup> 爾等<sup>う</sup> は亦<sup>すなわち</sup> 手を<sup>う</sup> 以て<sup>う</sup> せざる<sup>う</sup> 割禮<sup>う</sup> を<sup>う</sup> 受<sup>う</sup> けたり、<sup>う</sup> 即

<sup>にくしん</sup> 肉<sup>つみ</sup> 身の<sup>たい</sup> 罪の<sup>ぬ</sup> 體を<sup>ところ</sup> 脱ぐ<sup>かつれい</sup> 所の<sup>せんれい</sup> ハリストスの<sup>もつ</sup> 割禮<sup>なんぢら</sup> なり。洗<sup>かれ</sup> 禮を<sup>とも</sup> 以て、<sup>ほうむ</sup> 爾等<sup>ほうむ</sup> は<sup>ほうむ</sup> 彼と<sup>ほうむ</sup> 偕に<sup>ほうむ</sup> 葬

またかれ し ふくかつ かみ ちから しん もつ かれ とも ふくかつ  
られて、亦彼を死より復活せしめし神の力を信ずるを以て、彼と偕に復活せり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ、むなしいだましごとの哲学で、人のとりこにされないように、気をつけなさい。それはキリストに従わず、世のもろもろの靈力に従う人間の言伝えに基くものにすぎない。キリストにこそ、満ちみちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿っており、そしてあなたがたは、キリストにあって、それに満たされているのである。彼はすべての支配と權威とのかしらであり、あなたがたはまた、彼にあって、手によらない割礼、すなわち、キリストの割礼を受けて、肉のからだを脱ぎ捨てたのである。あなたがたはバプテスマを受けて彼と共に葬られ、同時に、彼を死人の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、彼と共によみがえらされたのである。

\*\*\*\*\*

誦經) 兄弟よ、我等の司祭長は實に是くの如き者たるべし、乃聖にして、惡に與ら

ず、垢なく、罪人に遠ざかり、且諸天よりも高き者、彼の司祭長等の如く先づ己

の罪、後に民の罪の爲に、日日祭を獻ぐるを要せざる者なり、蓋彼は己を獻げて、

一次之を爲せり。蓋律法は荏弱ある人を立てて、司祭長と爲せり、然れども律法の後

の誓の言は、世世に完全なる子を立てたり。我が言う所の首要は左の如し、我等に是

くの如き司祭長あり、彼は天に於て威嚴の寶座の右に坐せり、且聖所、及び眞の

幕、即人に非ずして、主の設けし者の聖務者なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。聖にして、悪も汚れもなく、罪人とは區別され、かつ、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたちにとってふさわしいかたである。彼は、ほかの大祭司のように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために、日々、いけにえをささげる必要はない。なぜなら、自分をささげて、一度だけ、それをされたからである。律法は、弱さを身に負う人間を立てて大祭司とするが、律法の後にきた誓いの御言は、永遠に全うされた御子を立てて、大祭司としたのである。以上述べたことの要点は、このような大祭司がわたしたちのためにおられ、天にあって大能者の御座の右に座し、人間によらず主によって設けられた眞の幕屋なる聖所で仕えておられる、ということである。

\*\*\*\*\*

### 【 アリルイヤ 洗礼祭前の主日 及び割礼祭の 第8調 】

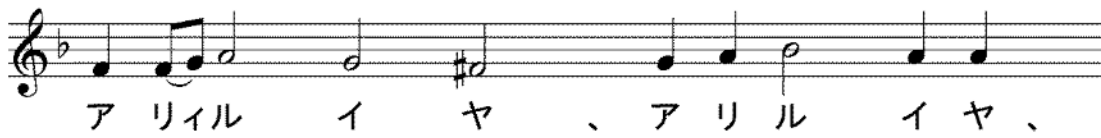
司祭) 爾に平安、

誦經) 爾の神にも、

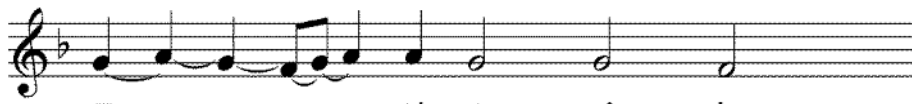
司祭) 睿智、

誦經) アリルイヤ、神よ、我等を憐み、我等に福を降せ、



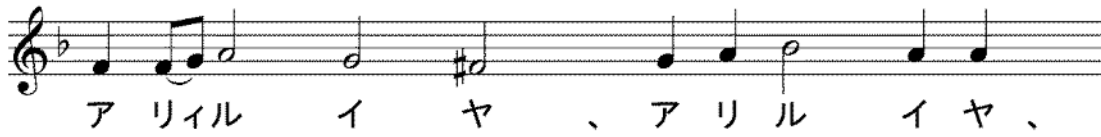


ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、

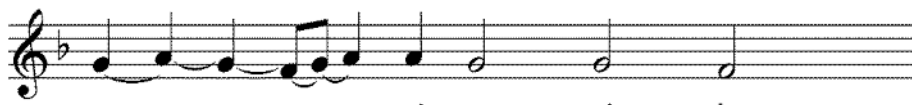


ア リル イ ヤ 。

誦經) <sup>なんぢ かんばせ もつ われら てら たま</sup> 爾の顔を以て我等を照し給え、

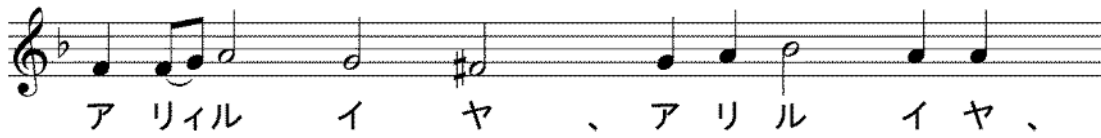


ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、

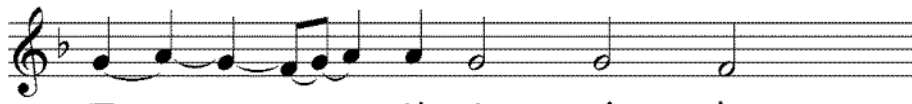


ア リル イ ヤ 。

誦經) <sup>ぼくしゃ みみ かたぶ ひつじ ごと みちび もの おのれ あらわ</sup> イズライリの牧者よ、耳を傾けよ、イオシフを羊の如く導く者よ、己を顯せ、



ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、



ア リル イ ヤ 。

司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ</sup> 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

<sup>おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup> 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

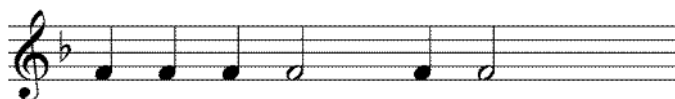
<sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup> て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 マルコ福音書1端 1章1~8節

ルカ福音書6端 2章20、21、40~52節

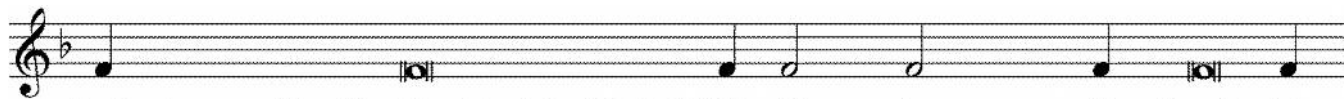
ルカ福音書24端 6章17~23節

司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup> 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、

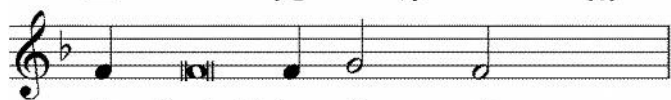


なんぢのしんにも。  
爾 神

司祭) <sup>でん せいふくいんけい よみ</sup> マルコ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 光 榮



はなんぢにきす。  
爾 歸

司祭) <sup>つつし き かみ こ ふくいん はじめ しょよげんしゃ する</sup> 謹みて聴くべし、神の子イエス・ハリストスの福音の始なり。諸預言者に録されし

<sup>ごと いわ み われわ つかい なんぢ めんぜん つかわ なんぢ さき なんぢ みち そな</sup>  
が如し、云く、視よ、我我が使を爾の面前に遣し、爾に先だちて、爾の道を備

<sup>の よ もの こえあ い しゅ みち そな そのこみち なお の</sup>  
えしめん。野に呼ぶ者の聲在りて云う、主の道を備え、其徑を直くせよと。イオアン野に

<sup>あ せん さづ つみ ゆるし ため かいがい せんらい つた ぜんちおよ</sup>  
在りて洗を授け、罪の赦の爲に悔改の洗禮を傳えたり。イウデヤの全地及びエルサ

<sup>ひとびとい かれ つ おのれ つみ みと みな がわ おい かれ せん う</sup>  
リムの人人出でて、彼に就き、己の罪を認めて、皆イオルダン河に於て彼より洗を受け

<sup>らくだ けごろも き こし かわ おび つか いなご のみつ くら かれの</sup>  
たり。イオアンは駱駝の毛衣を衣、腰に皮の帯を束ね、蝗蟲と野蜜とを食えり。彼宣べ

<sup>い われ あと さら われ つよ もの きた われかが そのくつ ひも と た</sup>  
て曰えり、我の後に更に我より強き者は来る、我屈みて、其履の帯を解くにも堪えず。

<sup>われ みづ もつ なんぢら せん さづ かれ せいしん もつ なんぢら せん さづ</sup>  
我は水を以て爾等に洗を授けたり、彼は聖神を以て爾等に洗を授けん。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 神の子イエス・キリストの福音のはじめ。預言者イザヤの書に、「見よ、わたしは使をあなたの先につかわし、あなたの道を整えさせるであろう。荒野で呼ばわる者の声がする、『主の道を備えよ、その道筋をまっすぐにせよ』」と書いてあるように、バプテスマのヨハネが荒野に現れて、罪のゆるしを得させる悔改めのバプテスマを宣べ伝えていた。そこで、ユダヤ全土とエルサレムの全住民とが、彼のもとにぞくぞくと出て行って、自分の罪を告白し、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けた。このヨハネは、らくだの毛ごろもを身にまとい、腰に皮の帯をしめ、いなごと野蜜とを食物としていた。彼は宣べ伝えて言った、「わたしよりも力のあるかたが、あとからおいでになる。わたしはかがんで、そのくつのひもを解く値うちもない。わたしは水でバプテスマを受けたが、このかたは、聖霊によってバプテスマをお授けになるであろう」。

\*\*\*\*\*

司祭) <sup>か としほくしや およ かれら つ ごと き ことみ こと たため かみ さんえいさんび</sup> 彼の時牧者は、凡そ彼等に告げられし如く、聞きし事見し事の爲に、神を讚榮讚美

して返れり。八日満ちて、嬰兒に割禮を行 うべき時 至りたれば、其名をイイスと名づ  
 けたり、即 其未だ孕まれざる先に天使の名づけし 所 なり。子は 漸く成長し、精  
 神 益 強 健にして、智慧充ち、神の恩 寵 は彼に臨めり。其 父 母 歳 毎に逾越節筵  
 にイエルサリムに往けり。彼の 十 二歳になりし時、亦 節筵の例に 遵 いて、イエルサリム  
 に上りしに、日 卒りて返る時、童 子イイス イエルサリムに 留 れり。イオシフと 其 母と  
 は之を知らずして、彼は 同 行 者の中に在りと 意 えり、一 日 程を行きて、彼を親 戚 知 己の  
 間 に尋ねしに、遇 わざりき、乃 彼を尋ねてイエルサリムに返れり。三日の後 彼に 殿に  
 遇 えるに、彼 教 師の中に坐して、且 聴き、且 問 えり。彼に聞 く 者 皆 其 智慧と 其 應 對と  
 を奇とせり。父 母 彼を見て 駭 けり、其 母 彼に謂 えり、兒よ、何 ぞ我等に 斯く 行 いたる、  
 視よ、爾 の父と我と 憂いて 爾を尋ねたり。彼 曰 えり、奚 ぞ我を尋ねたる、豈 我は我  
 が父に 屬する 所 に在るべきを知らずや。然れども 彼等は 其 言 いたる 言 を曉らざりき。イイ  
 ス 彼等と 偕に下りて、ナザレトに 來り、彼等に 順 い居りき。彼の母は 此等の 言 を  
 悉 くに 其 心 に藏めたり。イイスは 智慧と 齡 と 神 及 び 人 人 の 寵 愛 と に 益 進 め  
 り。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 羊飼たちは、見聞きしたことが何もかも自分たちに語られたとおりであったので、  
 神をあがめ、またさんびしながら帰って行った。八日が過ぎ、割礼をほどこす時となったので、受胎の  
 まえに御使が告げたとおり、幼な子をイエスと名づけた。幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵  
 に満ち、そして神の恵みがその上にあった。さて、イエスの両親は、過越の祭には毎年エルサレムへ上  
 っていた。イエスが十二歳になった時も、慣例に従って祭のために上京した。ところが、祭が終って帰  
 るとき、少年イエスはエルサレムに居残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。そして道連れ  
 の中にいることと思ひこんで、一日路を行ってしまい、それから、親族や知人の中を捜しはじめたが、  
 見つからないので、捜しまわりながらエルサレムへ引返した。そして三日の後に、イエスが宮の中で教  
 師たちのまん中にすわって、彼らの話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞く人々はみ  
 な、イエスの賢さやその答に驚嘆していた。両親はこれを見て驚き、そして母が彼に言った、「どうし  
 てこんな事をしてくれたのです。ごらんなさい、おとう様もわたしも心配して、あなたを捜していたの  
 です」。するとイエスは言われた、「どうしてお捜しになったのですか。わたしが自分の父の家にいる  
 はずのことを、ご存じなかったのですか」。しかし、両親はその語られた言葉を悟ることができなかつ  
 た。それからイエスは両親と一緒にナザレトに下って行き、彼らにお仕えになった。母はこれらの事をみ  
 な心に留めていた。イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された。

\*\*\*\*\*

司祭) <sup>か</sup> <sup>とき</sup> <sup>へいち</sup> <sup>た</sup> <sup>ここ</sup> <sup>そのお</sup> <sup>お</sup> <sup>もと</sup> <sup>およ</sup> <sup>お</sup> <sup>たみ</sup> <sup>しほう</sup>  
彼の時 イイス 平地に立てり、爰に其衆くの門徒、及び衆くの民、イウデヤの四方イ

<sup>ならび</sup> <sup>うみべ</sup> <sup>かれ</sup> <sup>き</sup> <sup>ため</sup> <sup>かつおのれ</sup> <sup>やまい</sup> <sup>いや</sup>  
エルサリム 并 にティルとシドンとの海濱よりして、彼に聽かん爲、且 己の病の醫され

<sup>ため</sup> <sup>きた</sup> <sup>もの</sup> <sup>またおき</sup> <sup>うれ</sup> <sup>もの</sup> <sup>かれらいや</sup> <sup>しゅうみんかれ</sup> <sup>さわ</sup> <sup>ほつ</sup>  
ん爲に來りし者、又汚鬼を患うる者ありき、彼等醫されたり。衆民彼に捫らんと欲

<sup>けだしちからかれ</sup> <sup>い</sup> <sup>しゅう</sup> <sup>いや</sup> <sup>かれ</sup> <sup>め</sup> <sup>あ</sup> <sup>そのもと</sup> <sup>み</sup> <sup>い</sup> <sup>しん</sup>  
せり、蓋能彼より出でて、衆を醫せり。彼は目を擧げて、其門徒を視て曰えり、神の

<sup>まづ</sup> <sup>もの</sup> <sup>さいわい</sup> <sup>かみ</sup> <sup>くに</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>もの</sup> <sup>いまう</sup> <sup>もの</sup> <sup>さいわい</sup> <sup>なんぢら</sup>  
貧しき者は福なり、神の國は爾等の有なればなり。今飢うる者は福なり、爾等

<sup>あ</sup> <sup>え</sup> <sup>いまな</sup> <sup>もの</sup> <sup>さいわい</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>わら</sup> <sup>え</sup> <sup>ひと</sup> <sup>こ</sup> <sup>ため</sup>  
飽くを得んとすればなり。今泣く者は福なり、爾等笑うを得んとすればなり。人の子の爲

<sup>ひと</sup> <sup>びと</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>にく</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>た</sup> <sup>かつの</sup> <sup>の</sup> <sup>し</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>な</sup> <sup>あ</sup> <sup>もの</sup> <sup>す</sup> <sup>とき</sup>  
に人人爾等を憎み、爾等を絶ち、且 詬り、爾等の名を惡しき者として棄つる時は、

<sup>なんぢら</sup> <sup>さいわい</sup> <sup>そのひ</sup> <sup>よろこ</sup> <sup>たの</sup> <sup>し</sup> <sup>てん</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>むくい</sup> <sup>お</sup> <sup>お</sup>  
爾等福なり、其日に喜び樂めよ、天には爾等の賞多ければなり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスは彼らと一緒に山を下って平地に立たれたが、大ぜいの弟子たちや、ユダヤ全土、エルサレム、ツロとシドンの海岸地方などからの大群衆が、教を聞こうとし、また病気をなおしてもらおうとして、そこにきていた。そして汚れた靈に悩まされている者たちも、いやされた。また群衆はイエスにさわろうと努めた。それは力がイエスの内から出て、みんなの者を次々にいやしたからである。そのとき、イエスは目をあげ、弟子たちを見て言われた、「あなたがた貧しい人たちは、さいわいだ。神の国はあなたがたのものである。あなたがたいま飢えている人たちは、さいわいだ。飽き足りるようになるからである。あなたがたいま泣いている人たちは、さいわいだ。笑うようになるからである。人々があなたがたを憎むとき、また人の子のためにあなたがたを排斥し、ののしり、汚名を着せるときは、あなたがたはさいわいだ。その日には喜びおどれ。見よ、天においてあなたがたの受ける報いは大きいのだから。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは  
主 光 榮 爾 歸 光 榮  
はなんぢにきす。  
爾 歸

※聖体礼儀③へ